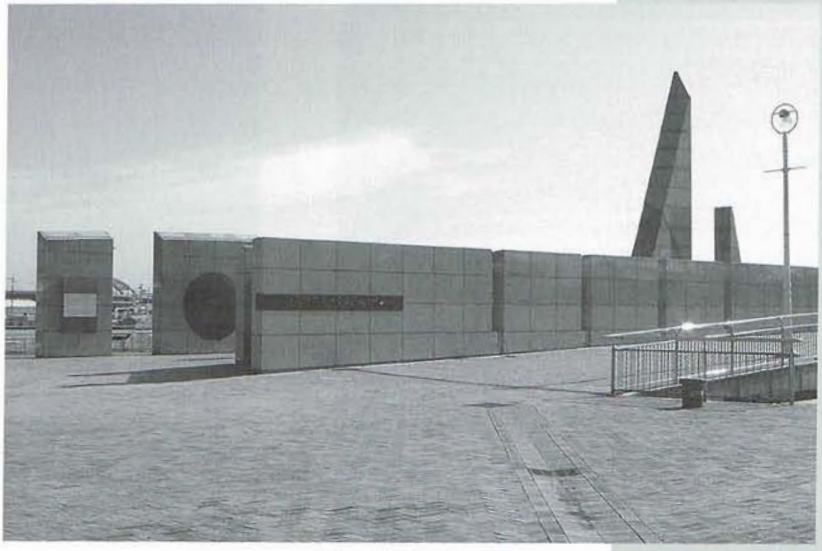
No.16
2006.Mar.

イベント学会　2005年度兵庫大会シンポジウム

災害を生き抜くイベント
「耐災の日」を提案する



CONTENTS

◆プログラム/大会趣旨 …… P2
◆開会挨拶 北本正孟 …… P3
◆来賓挨拶 齋藤富雄
◆基調講演 …… P4～5
『耐災のイベント、復興のイベント』堺屋太一
◆研究発表 …… P6～7
『提言・耐災イベントを世界で』梶原貞幸/澤田裕二
◆パネルディスカッション …… P8～11
『耐災の知恵を伝えるイベント』
橋爪紳也/河田惠昭/森 綾子/斎藤公男/大蔵芳夫
◆閉会挨拶・懇談会 …… P11
◆インフォメーション …… P12

イベント学会会報「イベントロジー」
EVENTOLOGY

2005年度兵庫大会シンポジウム

開催日：2006年1月20日(金)
会　場：兵庫県公館
（兵庫県神戸市中央区下山手通4-4-1）

プログラム

13：00

■開演……阪神・淡路大震災被害者への黙祷
岩崎　博　総合司会

■開会挨拶……北本正孟　イベント学会副会長

■来賓挨拶……齋藤富雄　兵庫県副知事

13：15

■基調講演…『耐災のイベント、復興のイベント』
堺屋太一　イベント学会会長

14：00

■研究発表……『提言・耐災イベントを世界で』
梶原貞幸　澤田裕二
イベント学会耐災プロジェクトチーム

15：00

■パネルディスカッション
……『耐災の知恵を伝えるイベント』

コーディネーター　橋爪紳也　イベント学会副会長
パネリスト　河田惠昭　人と防災未来センターセンター長
森　綾子　宝塚NPOセンター理事兼事務局長
斎藤公男　日本建築学会副会長
大蔵芳夫　味の素㈱ コンシューマー・コミュニケーション・センター長
梶原貞幸、澤田裕二
イベント学会耐災プロジェクトチーム

16：45

■閉会挨拶……望月照彦　イベント学会副会長

イベント学会とは

イベント研究者のみならず、さまざまな分野の研究者、技術者、専門家や実務者が経験や知識の多少にかかわらず参加し、積極的な相互作用を通じて「異質な知と技能のメルティング・ポット（るつぼ）」となる学会です。

多様な専門、異なった立場から提示される知識、ノウハウ、経験がときに競合し、干渉しあい、やがてそれらが共鳴、交響して、創造的に共同成果を生み出すような機会と場を創り出すこと、それこそがわれわれのめざす新しい学会です。

大会趣旨

そのときに備えて——「耐災の日」を提案する

2004年から2005年にかけて実施された、兵庫県の阪神・淡路大震災10周年記念事業『1.17は忘れない』。今回のイベント学会2005年度兵庫大会は、その関連事業の一つとして開催されました。

大会テーマは『災害を生き抜くイベント』—。

まずは災害への対応についての新しいコンセプトとして「耐災」を提案。

耐災とは、災害後のライフラインが途絶えた生活を、いかに耐えて生き抜くかを指すとともに、いかに早く復興への活力を取り戻すか、という視点を重視する考え方です。

一方、イベントは単なる娯楽ではありません。多くの人々の間に共通の思想と技能を生むものです。そこで、阪神・淡路大震災が起きた1月17日の次の土曜日を『耐災の日』と定め、今後、耐災イベントとして根付かせていこうと提案しました。

『1.17は忘れない』は兵庫県の阪神・淡路大震災10周年記念事業のテーマ。公式サイト（http://www.19950117hyogo.jp/）

阪神・淡路大震災 10周年記念事業
『1.17は忘れない』関連事業

会場となった兵庫県公館。明治35年に旧兵庫県庁として建てられたものを改築保存。震災にも耐えた

開会挨拶

イベント学会副会長
2005年度兵庫大会実行委員長　北本正孟

イベント学会では、各自治体の方々と協力して、地域固有のテーマをみつけて一緒に研究し、その結果を大会で発表しています。そこで発したメッセージを、地域の方たちに受け継いで頂くことが狙いです。今回のテーマは、「災害を生き抜くイベント」です。『阪神・淡路大震災10周年記念事業』の一つとして、兵庫県様のご協力・ご支援を賜り開催することができましたことに、深く感謝しております。

本大会では、「衣・食・住」の観点から『耐災』という考え方を提案したいと思っております。これをきっかけに、兵庫県に新しい『耐災』の潮流が生まれ、全国に向けて継続的にメッセージが発信されていくようになればと祈念しております。

来賓挨拶

兵庫県副知事　齋藤富雄

あの阪神・淡路大震災から10年目の節目をやっとの思いで迎え、今、11年目の新しいステージに立ちました。そのスタートの時に、イベント学会が、「災害を生き抜く」というテーマで、力強いイベントを開催していただきますことを、心からうれしく思っております。

本日のイベントでは、『耐災』という新しいコンセプトをご提案いただくようであります。災害が起きた後に続く、私達が経験した、あの苦しみ。それにどう耐えて生き抜くか。耐えるだけではなく、その中から新しいものをつかんで、しっかり生きていかねばということだと理解しております。

ちょうど今、東北や北海道をはじめ、豪雪に大変な困難を強いられている人がいます。兵庫県でも、80年ぶりの大雪が降りました。世界各地でも、昨年のスマトラ沖地震・インド洋大津波、アメリカのハリケーン、ロシアの大寒波をはじめ、自然災害が続いています。

災害は、避けることはできませんが、被害を少なくすることはできます。昨年は、阪神・淡路大震災の教訓を伝えるために、タイのプーケットに行ってまいりました。世界中のみんなが助け合う素晴らしい減災の世界。そうした社会の実現を強く願っています。

兵庫県では、昨年、災害を受けた被災者が、住宅再建をスムーズにできるように、住宅再建共済制度を設けました。年額わずか5000円の掛け金で、いざという時に600万円もの給付金が出ます。全国で唯一の制度です。家の大小、木造・鉄筋問わず、誰でも加入できます。罹災証明書があれば、すぐにお金が出ます。この制度を、ぜひ、ご近所の人にもオススメくださいとコマーシャルを兼ねまして、私の挨拶に代えさせていただきます。

基調講演　イベント学会会長 堺屋太一

『耐災のイベント、復興の

**阪神・淡路大震災で、私たちが学んだことは、
災害が起きた後に、過酷な生活が続くことだ。
震災10周年記念事業を機に、
そのための備えを考えてみてはどうだろうか。**

阪神・淡路大震災が残した教訓

兵庫県は、1995年1月17日に阪神・淡路大震災に見舞われました。従来の防災は、災害が発生した瞬間の対応が中心でした。確かにそれも重要ですが、もっと広範な問題は、災害の後、いかに節度と文化を保って生きるかということです。この大震災で、私達は、そうした重要な教訓を学びました。幸い、神戸では災害地犯罪が起こらなかった。これは、人類史上初めてのことだそうです。もっとも、暮らしの方は、大変なものでした。

自然災害、戦争災害、テロなどを含めて、被災の種類には、第一次災害から第四次災害まであり、被災地の人口、および、施設密集規模に応じて被害が乗数的に大きくなっていきます。

第一次災害はグラグラっと揺れたその時に、人体が損なわれたり財貨が失われるといった被害です。それは、都市の規模と比例しています。1万人の都市でケガ人が一人なら、100万人の都市なら100人。同規模の災害が1000万人の都市で起これば1000人です。

第二次災害は、火事のことですが、都市の大きさの二乗に比例します。1万人の都市と比べ、10万人の都市は、100倍の火災が発生するわけです。実際、神戸と新潟県の場合は、人口比は十数倍でしたが、火災の発生率は100倍以上でした。

第三次災害は、ライフラインが絶えることによって起こる災害。これは、都市の規模の三乗に比例します。水道、電気、ガスなど壊れる場所が広い上に、資材調達も、遠距離になり、復元作業も困難になります。東京都内では540万人の人が働いていますが、遠距離通勤者は通えないので、復旧に要する人員は足りなくなる。食料品は、コンビニ、デパ地下を合わせてもわずか400万人分しかない。水道や電気が止まったら、バケツで水を汲んで家まで運ばねばなりません。一人家族でも一日に、バケツ8杯分くらいが必要です。最近、高層マンションが増えていますが、とても運びきれるものではありません。だから、住めなくなる。

第四次災害は、一つの地域の活動が止まったことで、それ以外の全国、もしくは全世界にどういう影響を与えるかという問題です。これは、都市規模の四乗に比例します。東京が地震によって停電すれば、東証は1ヶ月くらいは再開できないでしょう。日本の金融機能は全停止しますから、各企業の経営も成り立たなくなる。政府のデータも、霞ヶ関のデータも使えなくなる。そんな状態が1ヶ月も続けば、日本は発展途上国になるでしょう。

耐災の思想を生活習慣に組み込む

日本人は、長期の災害の経験がありません。昔は木造住宅だったので、復興は簡単でした。燃料は壊れた柱を燃やせばいくらでもありました。水清き国ですから飲料水の心配もない。河川が短いから、洪水も二～

イベント』

三日で終わりました。三日以上の災害は想像しない。

ところが、大陸諸国では、災害は長いものです。洪水は、水がひくまでに1ヶ月以上かかるし、雪が降れば数ヶ月移動できない。数ヶ月単位の耐災が習慣づいているし、それをお祭りにしているところもある。春に行われる謝肉祭は有名ですね。暖かくなって肉が腐敗するので、40日間肉を食べずに、復活祭までの間は魚を食べる。これによって、魚料理のノウハウが蓄積されるわけです。ユダヤ教の過越しの祭りでは、すぐに食べられる種無しパンをつくります。耐災の祭りを毎年やれば、非常食や飲み水も祭の日に新しいものに更新する。いざという時には、道具一式を取り出せば、飢え死にすることはない。

キリスト教では、ノアの方舟を例に、「備えのある者は生き残る権利がある。備えないものは死ぬ義務がある」と徹底して教えます。

私達も、子供の代にまで、万一に備えるという思想をつくらなければいけない。耐災の日を年に一回開催し、その日は、七輪でご飯を炊いたり、保存食品を食べたりして過ごし、同時に新しい水や保存食と入れ替える。バレンタインのように、耐災グッズを大切な人同士で贈りあう習慣を作ってもいい。

このような新しい耐災の日の習慣を、この兵庫県から、そして、このイベント学会から、全国に、そして後世に伝えたいと思います。

被災の種類は、第一次災害から第四次災害まである。

第一次災害

地震、戦争などの直接的な被害
被害は都市の規模に比例する機会比例

第二次災害

災害から生じる火事
被害は都市の規模の二乗に比例

第三次災害

ガス、水道、電気などライフラインの麻痺
被害は都市の規模の三乗に比例

第四次災害

一つの地域の活動の停止が日本全国、世界に与える影響
被害は都市の規模の四乗に比例

耐災教育

海外

●ノアの方舟の訓話
「備えのある者は生き残る権利がある。備えないものは死ぬ義務がある」

●謝肉祭
謝肉祭から復活祭までの40日間肉食を禁じることで魚料理のノウハウの継承

●過越しの祭
非常食・種無しパンの焼き方のノウハウの継承と道具・材料の保存

日本

●耐災の日の創設
・耐災グッズの贈り合いなどを通じて耐災意識を習慣化する
・七輪の各家庭への設置や使用方法の獲得
・期限切れを防ぐ保存食の入れ替え
・仮設住宅の設置、炊き出し、つるべを使った井戸からの水のくみ上げ方法などをイベントに組み込むことで、災害時の多様なノウハウを習得

イベント学会
耐災プロジェクトチーム
梶原貞幸

「耐災の日」イベントのあり方とは

兵庫県民の耐災経験知は、言葉にしにくい暗黙知が多くを占めています。この暗黙知を共有・継承する上で、イベントは最良の方法でしょう。双方向で直接的なコミュニケーションが図れますし、耐災の疑似体験も提供できる。耐災の考え方を社会的に認知させる機能も十分に備えています。

それでは、耐災の知識・意識を普及させ、年中行事として、日本だけでなく世界で定着させるためには、どのようなイベントであるべきか。

地域、コミュニティ団体、職場など社会の各セクターの連携・統合イベントであること。分かりやすくて共感が得られること。普及させるための文化的な基盤を獲得すること…。

これらの基本的な方向性を踏まえた上で、私どもは「凌ぎの祭り」というイベントコンセプトを提案します。

具体的には、1月17日の翌土曜日を「耐災の日」とし、地域や職場などの各セクターが、耐災体験プログラムのような行催事を展開する。

イベント学会
研究発表

提言・耐災イベントを世界
「耐災の日」「凌ぎの祭り」と

「耐災の日」「凌ぎの祭り」の普及・定着を図り、大震災を生き抜いた兵庫県民の耐災経験や知恵を継承していく。その目的を達成できるイベントとは——。堺屋会長の提言を受け、イベント学会では、耐災プロジェクトチームを結成し、議論を重ねた。今回は、その成果を発表させていただいた。

イベント学会
耐災プロジェクトチーム
澤田裕二

幸福感と開
文化となる

耐災力の向上には、経験知の蓄積に加え、防災グッズの進化も不可欠。知識を蓄えグッズも開発するイベントを繰り返すことで、耐災力がどんどん向上する。そんな好循環を導くことが、「凌ぎの祭り」の理想型でしょう。

そのためには三つのポイントがあります。まずは「参加する方々が幸福感を感じられること」。二つ目は、異分野のクリエーターや技術者を集めることで、「イベントならではの開発効果を生み出すこと」。三つ目は、多くの知恵を募るために「情報発信すること」です。

イメージとしては「クリスマス」や「アースデー」が分かりやすいでしょう。世界中で皆が進んでおこない、幸福感と開発効果があり、一つの文化にもなっているわけです。

では、「凌ぎの祭り」はどんな構造で行うべきでしょうか。クリスマスは、各々が特色に合わせたイベントを実施する「参加事業」が大半ですが、当初は参加者を繋ぐ「コア事業」が必要でしょう。たとえば愛知万博のように、ネットや印刷物で

それらに加え、耐災グッズのプレゼント交換を推奨していきます。クリスマスやバレンタインデーと同様に、耐災グッズを交換しあう習慣行事があっても良い。それが生活文化に根付くことで、文化的基盤が獲得でき、初めて年中行事になると考えています。

このようなコミュニティ行事とファミリー行事が両輪となり、ネットワークされることで、暗黙知の獲得や、市場創造・産業発展につながる。そのように考えています。

で「耐災デザイン」

発効果がありイベントを

参加者を繋ぐ。「帰宅体験ウォーク」で職場や学校、家庭を繋ぐ。ハブ会場では「耐災デザイン大賞」、「もしある体験イベント」、コンサートなどを催します。

こうしたコア事業によって、地域や職場などで、自発的な参加事業が生まれるはずです。地域なら、「縁」をテーマにした避難生活体験や耐災グッズのワークショップ、家族・友人なら、「愛」をテーマにした、インフラのない生活体験…。文化として定着させるためには、こうした参加事業が大変重要といえます。

「凌ぎの祭り」イベントとは

参加者を繋ぐ『ハブ』の役目を果たす「コア事業」と、地域や学校などが主体的に行う「参加事業」の2パターンで展開します。

コア事業 耐災デザイン大賞

普段は耐災事業に関わっていないアーティストや技術者も募り、耐災グッズの機能やデザインを競います

コア事業 もしある体験イベント

「もしもある日震災が起こったら」をテーマに、お風呂や非常食など、耐災グッズの試用イベントを開催。帰宅体験ウォークなども実施します

参加事業 もし家イベント

「もしも家がなくなったら」を想定し、地域で避難生活体験や耐災グッズのワークショップなどを催します

参加事業 耐災グッズの交換

友人や恋人の間で、耐災グッズをプレゼント交換。お揃いの参加バッジやブレスレットを贈り合っても良いでしょう

パネルディスカッション

イベント学会が提案した「耐災の日」のコンセプトや行事。
各分野の専門家が、実現に向けての具体的な方法論につい

『耐災の知恵を伝える

災害文化の創造

橋爪…兵庫県では1月を減災月間、1月17日を兵庫安全の日と定めています。また、遠距離通勤者が歩いて帰るメモリアルウォークをはじめ、様々なイベントも開催しています。私達イベント学会では、このような兵庫県の『経験知』、あるいは『耐災知』を『耐災の日』として、全国、あるいは世界に「生活文化となるように広げていこう」と提案しました。

パネルディスカッションでは、先ほどの研究発表の最後で提案しました「衣・食・住」、耐災の日のコンセプトやデザインをどう進化させていくのか、また、イベントとしての方法論などを含めて、それぞれの専門の方から、ご意見を頂戴したいと思っております。最初に、震災後から「災害文化」が大切だと主張されてきた河田先生にお願いいたします。

河田…私が所長をしている京都大学防災研究所は、1950年に発生したジェーン台風をきっかけに設立されました。災害による被害を技術によってシャットアウトしてやろうというエンジニアの思いがこもっていたため、防災研究所という名前がついているんですね。英語に直せば、「Disaster(災害) Prevention (防止する) Reserch Institute」。ところが、英語がネイティブの人に、「Prevention」というと、けったいな顔をする。「災害なんて防げない」というわけです。「一体、何をするところなのだ?」と聞いてくる人もいました。

橋爪氏

河田氏

日本では、ずっと壊れない構造物によって被害を少なくすることを目指していました。ところが、防災グッズを枕元に置いて寝ても、震度6強になれば、どこかに飛んでいってしまう。付け焼刃な対応では、災害を迎え打つことはできないことが、阪神・淡路大震災がきっかけによく分かりました。災害への対応は、抵

衣の提案

「普段着として使える、ファッション性と機能性を」

(財)日本ユニフォームセンター

日大理工学部と滋賀県立大学の学生の方々をモデルにユニバーサルウェアのファッションショーを開催

燃え難い。見えやすい。防寒性が高い……。その上でスタイリッシュさを併せ持つことが重要だ

災害時に訪れる寒さ、暗闇、火災——。こうした事態に対処できる衣料として提案されたのが日本ユニフォームセンターの『ユニバーサルウェア』だ。このウェアはもともとユニバーサルデザインの考えに基づき「誰でも着られる衣料」のコンセプトで、著名デザイナーとのコラボレーションで生まれた新しい意匠。実はこれが「そのまま耐災の考えと合致する」(イベント学会 耐災プロジェクトチーム・岩崎博)という。

例えば燃え難い素材で作られたワンピース、畳むと帽子にしまえるほど小さくなるコート、反射テープを配したジャケットなどだ。高機能に加え、スタイリッシュさを併せ持つのがポイント。いざという時にクローゼットからわざわざ取り出す衣料では仕方がない。

「普段着として使えるデザイン、使いたいと思えるデザインが重要なのです」(岩崎)

て活発に議論した。

イベント』

コーディネーター　橋爪紳也 イベント学会副会長、大阪市立大学大学院助教授
パネリスト　河田惠昭 人と防災未来センターセンター長、京都大学教授
森　綾子 宝塚NPOセンター理事長兼事務局長
斎藤公男 日本建築学会副会長 日本大学理工学部教授
大蔵芳夫 味の素㈱コンシューマー・コミュニケーション・センター長
梶原貞幸、澤田裕二 イベント学会耐災プロジェクトチーム

大蔵氏

斎藤氏

梶原氏

抗するものではなく、被害を減少させるべきものなんですね。打たれ強い、回復が早い、そういう社会にしていかなければと思っています。『耐災』が人々の衣食住の生活文化として根づけば、非常に強い地域防災につながっていくと思います。この動きが、どんどん広がっていくことを期待しています。

耐災の衣・食・住

大蔵…私は、食品会社のお客様相談部門にいて、年に四万件くらいのご提起を受けています。昨年は、特にお粥に関しての声が多かったのが印象的でした。「非常用に食べられますか」「暖めなくても大丈夫ですか」「おいしかったので、いろいろな味のものを非常食用に10袋も買ってしまいました」などです。私どもの会社では、スーパーを中心に非常食セールの企画としておかゆの利用を提案してきましたので、実際にこのようなお声が増えたことはうれしいことでした。加工食品メーカーの一員として、保存性や簡便性といった加工食品が持つ本来の機能を、震災時にどう生かせるか、もっともっと考えていきたいと思います(※詳しくは下段参照)。

河田…ただ、ご飯で問題なのは、便の量が多くなることなんですよ。震災の時は、ほとんどトイレが使えなくなりますからね。フィリピンでは、避難食と言えば宇宙食。ほとんど便が出ないからです。災害の特性にあった避難食を用意する必要があると思います。

食の提案

「いつもの食品にひと工夫を。年に二度『保存食を食べる日』を」

味の素株式会社コンシューマー・コミュニケーション・センター長
大蔵芳夫氏

パネリスト全員が、白がゆと卵スープでつくった雑炊を試食。「美味しい」の声が続出

離れて一人暮らしをする親や子供に「耐災セット」として加工食品のセットを送る提案もあった

食材の備蓄は耐災の基本。とはいえ乾パン等の非常食は賞味期限が長すぎ、気が付いたらもう食べられないということも多いし、味の満足度も低い。食事から得られる温かさや美味しさが、単なる栄養補給を越えた"元気の素"になることを考えると、物足りなさもあるわけだ。そこで大蔵氏が提案するのが普段の食品を耐災食とするスタイル。「例えばレトルトがゆは1年保存が利くし、温めなくとも食べられます。フリーズドライのスープを加えれば雑炊にもなります。真空パックの餅やシリアルも保存性が高く味もよい。十分耐災食になるんです」(大蔵氏)。こうして備蓄した加工食品を「防災の日」と「耐災の日」と年2回、食卓に広げることを習慣化する提案もあった。「賞味期限がくる前に毎年在庫を更新できる。もちろん万一のシミュレーションにもなります」(大蔵氏)

パネルディスカッション

『耐災の知恵を伝

斎藤…私は、小学校1年生の時が終戦だったので、万一ということは、常に頭から離れません。もう一つは食べざかり遊びざかりでしたから、食べ物や着る物への執着も強く、日々、すべてもったいないの精神です。そういう二つの気持ちからの研究は、イベント学会に近いかもしれませんね。

以前、建築学会で、「被災した後の時間と空間を親子で過ごそう」というイベントを開催しました。魚網で補強した巨大テントの中に、子供達がつくった段ボールの仮設住宅を並べてそこで過ごす。炊き出しなんかもしました。このようなお祭りの際、災害時に備えて練習する。また、子供に作らせることは、ものを大切にすることにもつながります。
(※詳しくは下段参照)。

梶原…先ほど、ユニバーサルウェアのお話とファッションショーがありましたが(※P8下段参照)、ユニバーサルデザインは、日本語で言うと共用デザインとなります。日常着ていてファッショナブルで機能的。しかも災害時に役立つ。こういう物があって、初めてイベントは活性化するし、また、プレゼントにも使われるようになると思います。

澤田氏

森氏

イベントと復興活動の共通項

森…明石の自治会では、以前から、確かお祭りだったと思いますが、町内会のみなさんで、よく炊き出しをしてました。だから、震災の時には、すぐに炊き出しができたわけです。また、宝塚祭りで采配をふるっていた市の職員は、災害のときでも、非常にテキパキと動いていました。そうした人たちを見ていると、お祭りと災害の復興は、関係している、イベントは人材育成につながると確信しました。

また、イベントは、人の心も元気にします。この10年間、阪神では、ものすごく沢山のイベントを開催してきました。「今年で何年目…。もう何年目」。みんなでイベントを繰り返しながら、だんだん元気になっていきました。この間、阪神では、誰でもイベントが開催できるくらいのノウハウが蓄積されていきました。こういうことを耐災の日にやることは、ものすごく意義があると思います。

澤田…森さんがおっしゃるように、私も、阪神・淡路大震災を見た時に、防災とイベントは非常に近いと思いました。イベント業界は、何が起ころうと、決まった時間の中で、オープンさせて皆を喜ばせなければいけない。今、ある物で、なんとかするというのが、イベント屋の真骨頂です。そういう意味で、業界のコンセプトが、近いなと思いました。

住の提案

「バイオかまくら……祭りの空間=耐災の空間」

日本建築学会副会長 日本大学理工学部教授
斎藤公男氏

完成した『バイオかまくら』。内部には、「衣」の提案としてユニバーサルデザインのファッションが、「食」の提案として耐災食が展示された

いわゆる仮設住宅ではなく、斎藤氏が提案したのはパブリックスペース。アルミの骨組みを白い膜で覆ったドーム状の建築物『バイオかまくら』だ。「復興や耐災の時にはコミュニティの存在が何より力になります。衣食住を越えた『遊ぶ』『集まる』といった面でも建築は貢献できると考えた」(斎藤氏)。そこで「いつでもどこでも誰とでも」「素早く簡単に手作りで」「大きくて丈夫でカッコイイ」「軽くたためて何度でも」の4つを条件に設計。そして生まれたのが、骨格と筋肉のような仕組みを持ち、仮設的で可動的な上、美しさを備えた白いドームというわけだ。この設置作業を、例えば御輿をかつぐように祭などの場で実践、人々が常日頃体験していく仕組みづくりの重要性にも触れた。「経験が、いざというときの訓練になる」(斎藤氏)

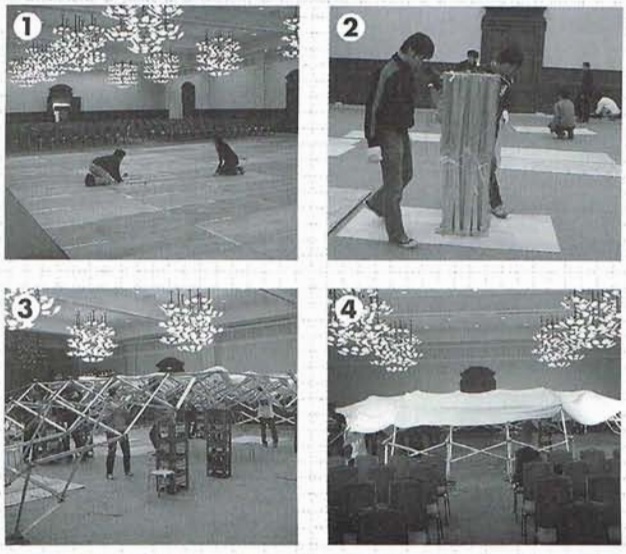
えるイベント』

梶原…ただ、耐災の日を身近な行事として定着させていくためには、やはり、最初は力技で、行事習慣を広げるためのイベントを開催することが必要だと考えています。内容については、プレゼンテーションを聞くうちに、心の問題が非常に大事だと思いました。丈夫さとか、機能を訴えるのではなく、「プライバシー」とか「味」とか…、そういう心の問題を重視したイベントにしたいと思っています。

森…震災以後、地域でコミュニティビジネスを作っていく事業をやり、すでに220くらいの団体が生まれましたが、今日のお話を聞いていて、防災関連を核にしたコミュニティビジネスの起業家が現れてくれたらいいなと思いました。

橋爪…今日の大会を契機として、耐災というキーワード、そして「耐災の日」という年中行事を広めていくことができればと心から願っています。ありがとうございました。

バイオかまくらができるまで



日大理工学部の学生の方々がセッティング。会場に見事な『バイオかまくら』が、見る見るうちに設置されていった

閉会挨拶

イベント学会副会長
多摩大学大学院教授
望月輝彦

本日のシンポジウムでは、『耐災』が次の新しい社会や地域をつくることにつながるという力強い主張を感じました。イベントを通じて、日本が耐災という力を持つためには、市民力、企業力、社会技術力の3つのベクトルが融合する必要があると思いました。これに行政力が加われば、大変な社会運動が起き、より良い社会づくりにもつながりそうです。最後に、この大会で提案した「耐災の日」。先ほどの研究発表でも申し上げた1月17日（兵庫の安全の日）の次の土曜か日曜日という案はいかがでしょうか。地域社会が安心・安全で豊かなコミュニティーに成長することを期待します。ありがとうございました。

交流懇談会

挨拶をする兵庫県・東田雅俊防災監

大会プログラム終了後、公館3階に場所を移して、交流懇談会が開催されました。

堺屋太一会長の挨拶の後、兵庫県の東田雅俊防災監がご挨拶。「防災、減災、それに耐災の考え方があいまって、災害に強いライフスタイルが確立される」とのお言葉を頂きました。乾杯の後は、賑やかな宴の場。和洋折衷のメニューの中には、当時、神戸ポートピアホテルが被災者向けに提供した「豚汁」「そばめし」も含まれ、宴席でも耐災について考えられるユニークな趣向となっていました。

全てのプログラムを終え、終始和やかな雰囲気

INFORMATION —事務局からのお知らせ—

イベント学会個人会員理事選挙のお知らせ

現在のイベント学会理事・監事は、任期2年で2004年6月に選任されました。本年6月の総会でその任期が終了しますので、新しい理事を選任することになります。個人会員理事を選ぶ選挙管理委員会が3月にスタート、その後おおむね下記の手順で会員にご案内する予定です。なお今回は、配布された個人会員名簿から理事にふさわしい方を10名お選び下さい。

個人会員名簿配布 → 会員による投票 → 上位10名を理事に → 総会承認

(注)理事選挙は、イベント学会の個人会員・法人会員であって、2005年度会費を納付済みの会員だけが参加できるのでご注意ください。

「耐災の日」イベントアイデア募集

2005年度兵庫大会は一般の人も含めて236名の方の参加がありました。「耐災」という新しい概念の提案でしたが、堺屋太一会長の明快な基調講演、耐災プロジェクトチームからのユニークな研究発表、それに「耐災」コンセプトに賛同いただいたパネラーの方々からの具体的な提案により、参加者にはよく理解され、共感を持たれたように思います。

兵庫大会に参加できなかった会員の方々には、イベント学会のホームページで詳しく内容をお知らせする予定です。4月中にはご覧いただけると思います。

つきましては、「耐災の日」を今後実現していくための施策やアイデアについて、皆様からの積極的なご提案をお待ちしています。

イベント学会ホームページ
http://www.eventology.org/

イベント学会事務局
eventlgy@kk.iij4u.or.jp

イベント学会入会手続き

1)入会ご希望の方は、申込書(会員種類別)にご記入の上イベント学会事務局あてご郵送下さい。
2)申込者について理事会等で審議し、入会を承認された方には入会承認書と振込み案内をお送りしますので入会金(初年度のみ、準会員は不要)と年会費を指定の口座にお振込み下さい。
3)これ以降、会報『イベントロジー』や研究報告書、大会、部会などのご案内をお届けします。

イベント学会会費一覧(2005年度/円)

会員種類	入会金	年会費	備考
1)個人会員	5,000	10,000	個人
2)準会員		2,000	大学生、大学院生、専門学校生など
3)自治体会員	20,000	50,000	地方自治体
4)法人会員(1口)	100,000	100,000	企業、団体などの法人

EVENTOLOGY NO.16/2006.Mar
■発行人/堺屋太一 ■編集人/宮木宗治 ■発行日//2006年3月
■発行所/イベント学会事務局 〒102-0082 東京都千代田区一番町13(一番町法眼坂ビル3F)
TEL:03-5215-1680 FAX:03-3238-7834 URL:http://www.eventology.org/